

斜位を維持するための視機能の検討 ～間欠性外斜視の症例から～

札幌看護医療専門学校 視能訓練士学科3年
岩本沙耶 小杉美由樹 土開菜々子 中村汐音 森結菜

1. はじめに

人には二つの眼があり、両眼の視線（眼位）を揃え、各眼の像を重ね合わせる（融像する）ことで物一つに見ている。また、眼科では眼位について、片方の眼が常にずれている状態を「斜視」、日常では視線はまっすぐだが片眼を隠したときのみ眼がずれる状態を「斜位」と呼んでいる。斜視では物が二つに見える、立体感を感じにくいといった不都合が起こってしまうため、融像力を使って眼位を斜位の状態に維持することが好ましいとされている。

今回、裸眼や眼鏡装用時には外斜視となってしまうが、コンタクトレンズでは眼位を斜位に維持できるという、間欠性外斜視の症例に出会った。そこでどのような要因が眼位の維持に影響をもたらしているのか、視力や各眼の見え方の差などに注目し、検討した。

2. 症例

20歳女性。8歳から眼鏡をかけており17歳からコンタクトレンズ（以下CL）を装用している。3年前から起床時、疲労時など裸眼では外斜視となるがCL装用の日常視では、眼位が斜位に維持されている。

視力と屈折値（眼の球面度数）は以下のとおりである。裸眼視力は右0.2、左0.05で25Δの外斜視。常用眼鏡の度数は右-3.75D 左-7.50Dで16Δの外斜視。常用CL度数は右-4.25D、左-6.50Dで14Δの外斜位。

両眼視は良好で前眼部・中間透光体・眼底に異常は見られなかった。

矯正の有無や矯正方法によって眼位が異なる原因を調べるため、以下の検査を行った。左右の近

視度数に差があることに対する不等像視の有無、そして融像に関与すると思われる、視力値や両眼のバランスについて精査することとした。

視力による眼位の変化については、一眼を視力1.5に保ちながら、もう片眼の視力をCLによって段階的に下げていき、どの段階で斜位から斜視となるのかを調べた。また、両眼の視力を同等に下げていき、斜位から斜視となる視力値を求めた。

3. 結果

常用眼鏡での不等像視検査の結果に不等像視は無かった。近視度数に差があるものの左右の眼に映る像の大きさは等しいことが分かった。

右眼視力1.5で左眼視力のみ下げた結果、視力0.4までは外斜位、0.3で外斜視となった。左眼視力1.5で右眼視力のみ下げた結果、視力0.4までは外斜位、0.3で外斜視となった。

両眼の視力を同等に下げると各眼0.07まで外斜位、0.05以下で外斜視となった。つまり両眼の視力のバランスが良いことで眼位を維持しやすくなったと考えられる。

4. 結論

間欠性外斜視を含めた斜位の維持には、両眼のバランスが大切であり、融像力を発揮する矯正視力0.5以上、片眼0.1以上が必要であり、左右の視力のバランスや不等像を考慮した屈折矯正を行う必要があることが分かった。

参考文献：視能学

あたらしい眼科 2015年